

平成19年6月25日発行 (毎月1回 25日発行 No.207)

# RHSJ

The Japan Branch of  
The Royal Horticultural Society



英国王立園芸協会日本支部



2007 **7**

# チェルシー・フラワーショウ 2007

## 環境意識の多様化— 時代を映す花と人の競演

写真・文：青山知花

ここ数年連続参加しているショウ・ガーデンの中にはスタイルや植栽の傾向に類似性がみられる一方、異彩を放つデザイナーらの作品も注目を集めた。20のショウ・ガーデンの中、最優秀賞 (Best in Show) を受賞した「600日をブラッドストーンと共に」ガーデンは(写真1)その個性的な様相から関係者の間でも賛否が分かれる庭であったが、RHSの審査員の公平性と懐の広さをみうける機会になった。一般的に受け入れやすい正統派のデザインの庭を評価するだけでなく、革新的なデザインの庭のチャレンジ精神を評価していると考えられるからだ。チェルシーが単なる見本市や博覧会でなく、真剣勝負の「コンペティション」であることを物語っている。

スウェーデンから初参加した「リンネに捧ぐ」ガーデンはさまざまな角度から本年一番注目された庭となった。自然科学者、植物学者、動物学者、地質学者、医師と多才であったカール・フォン・リンネ (Carl von Linné 1707-1778) は「近代分類学の父」と呼ばれ、現在用いられている植物の学名表記法 (二名法) を確立し、その重要な業績とゆかりのある植物を紹介する庭がデザインされた。(写真2、3)

一方、一般人気投票 (BBC RHS People's Award) では「ヒドコット・マナー・ガーデンの100年を祝う」ガーデンが受賞した。(写真4)

### <チェルシーと環境思考>

今年のショウ・ガーデン全体の所感は環境意識が浸透し、温暖化対策が多様化してきたことだ。設営に使用する木材や肥料の倫理的な選定方法、会場内の節

天候に恵まれた本年のチェルシー・フラワーショウ。参加国は毎年増え植物やデザインも多様化に向かっている。また、環境問題への関心がいっそう高まり出展者はさまざまな形で展示に反映し始めた。本年は日本からはスモール・ガーデン部門 (デザイン) に3組が出展。

ショウ・ガーデン (ガーデン・デザイン) 部門受賞作品の本年の傾向を中心に、会員公開日と合わせてプレスデー (関係者内覧日) の様子なども交えて今年のチェルシーをレポートする。



水、会期後の植物や部材のリサイクルなど。ショウ・カタログの出展者の説明に環境関連の言葉「環境に優しい」「再生可能」「循環利用」などの言葉が記されていない物はないほどだ。

移設プランも徐々に増え「リンネに捧ぐ」ガーデンはスウェーデンのGöteborg Botanical Gardenへ、「アムネスティ・インターナショナル」ガーデンはロンドン国際事務局の屋上にそれぞれ移設され (写真6)、内山緑地の「東からの風」ガーデンも二宮孝嗣氏がコッツウォルズにデザインした庭に植物を移設すること。大変な労力と費用をかけて作ったガーデンがこのように生かされていくことはとても良い傾向だ。



さらにRHS本部も全国にネットワークのある慈善団体のGroundworkと組み、不要になった展示物を地方自治体に還元する活動を始めた。

本年新たに設けられたルーフ・ガーデン部門は(シティー・ガーデン部門より独立)5つの屋上ガーデン出展者に隣接してRHS本部も相談窓口を設けた。土地に限りのある都市生活者の憩いの場としてだけでなく、都市の緑化を推奨していると考えられる。

環境問題は、先頃ドイツでおこなわれたG8サミットでも主要議題となったが、外交的にまとめられたガイドラインは40年以上も先の公約である。主に先進国から参加しているチェルシー出展者は、これらの環境問題に対して、表面的でない具体的な形で提案をおこない、園芸を通じ一般に広める役を担っている。

チェルシー出展にはさまざまな企業、団体が参加するが、ここでその社会的責任にも注目したい。前述の「リンネに捧ぐ」ガーデンの参加は、生誕300年を機会にリンネの功績を今一度振り返る教育的の機会を与えてくれた。一方、同じ300年の節目に創業を祝い参加した、嗜好食料品などを扱う英国最古のデパートの「フォートナム・アンド・メイソン」ガーデン。ガーデンの壁面に沿って据えられた特注の「ミツバチ箱」。会期終了後、ロンドン中心街にある本店屋上に移築され「ロンドン産」のハチミツを作り販売するなど、庭を眺めるだけでなく夢や話題を提供している(写真8)。

また、「サステイナブル・ワイン」ガーデンを出展しているワイン製造会社のFetzerはRHSと共同で英国の園



芸家の環境意識の調査もおこない、会期中に結果が発表された(写真7)。(http://www.rhs.org.uk/news/pressreleases/chelsea270307.asp)

「英国ガン研究所」(写真5)や「アムネスティ・インターナショナル」(写真6)の庭のような公益団体の広報活動の一環としての参加も、商業中心になりがちな博覧会にバランスをもたらしている。

**1. 600 Days with Bradstone by Sarah Eberle (Gold賞&最優秀賞)** 昨年、日本人観覧者に人気のあった「裸足で歩こう」ガーデンをデザインしたエブレー女史の今年の庭は、火星探査の為に600日間を宇宙ステーションで過ごす宇宙飛行士や研究者の心身をサポートする為に考えられた大変機能的な庭になっている。8年あまりに渡って欧州宇宙機関らとリサーチをおこなった結果を反映させ、オリーブなどの食用植物や薬用植物を栽培するエリアと、植物とのかかわりを持ちリラックスするエリアからなっている。

**2. A Tribute to Linnaeus: The National Linnaeus Tercentenary Committee, Stockholm, Sweden; by Ulf Nordfjell (Gold賞)** この庭はスウェーデンの森のイメージを現代的なフォーマル・ガーデンとして仕上げている。色を抑えた植栽と構造物をバランス良く配置しシンプルでありながら情緒性もある庭だ。もちろんリンネが愛した植物-Linnaea borealis(リンネソウ)-などがスウェーデン自生の植物と共に植栽されている。

**3. スウェーデン国家事業の一環として参加したこの庭には、スウェーデンのカール16世グスタフとシルヴィア王妃も内覧日に立ち寄られデザイナーのノードフィエル氏と歓談された。また、リンネ協会の名誉会員でおられる天皇陛下はロンドン・リンネ協会主催の記念行事にご臨席され「リンネと日本の分類学」と題された記念講演をされた(シルヴィア王妃の右手後方にみえるのはアーティストのAnne-Karin Furunesによるリンネの肖像を現代的にアレンジした作品)。**

**4. Celebrating 100 years of Hidcote Manor by Chris Beardshaw (Silver-Gilt賞)** ベアドショー氏は昨年に引き続き、過去に作られた庭からインスピレーションを得て、20世紀を代表する庭を再現した。「アーツ・アンド・クラフト」ガーデンの特徴である生け垣で庭を3カ所に区切りそれぞれにちがう雰囲気を持つ庭をボリュームのある植栽で再現した。

**5. Cancer Research UK Garden by Andy Sturgeon (Gold賞)** 昨年に引き続きスタージャン氏のデザインによるCancer Researchガーデンは、まるでジェットコースターのような、オーク材を使った彫刻により、生け垣、ベンチ、あずま屋など、庭のさまざまな要素を一体化するデザインとなっている。奥の白い壁にかけられている3枚の黒い彫刻は、日本人作家のMari-Ruth Odaによるもの。



7



8



6

**6. Amnesty International Garden for Human Rights by Paula Ryan and Artillery Architecture & Interior Design (Silver-Flora賞)**

屋上庭園としてデザインされた初参加の人権擁護団体の庭は、倫理、社会、環境への責任を果たすという団体の理念を反映した清潔感のあるデザインの庭になっている。有刺鉄線を巻かれたアムネスティのシンボルを模した彫刻が印象的に据えられている。

(Walter Bailey作)

## インターネットでも楽しめる切尔西

英国では切尔西期間中、毎日中継されるBBCの放送は述べ10時間以上におよび視聴者は300万人以上。まさに国民的イベントなのだ。(英国の総人口は約6,000万人)。そんな中、ここ数年RHS本部のオンラインチームが日進月歩のインターネット技術を生かした情報を配信し、海外からでも切尔西を楽しむ機会を与えてくれている。とくに切尔西では通常庭の中に入れないが、パソコンのマウス操作で360度自由自在に、庭の中をまるで宇宙遊泳しているように体験できる。(http://www.rhs.org.uk/chelsea/2007/live/ipix/index.asp)

会員公開日、ゲートから勢いよく押し寄せる会員が展示関係者に向かって繰り返す質問は「この植物の名前は?」。そんなリクエストに答えるため出展者は植物リストを用意しているが、来場できない人々にも参考にできるようBBCのサイト(http://www.bbc.co.uk/gardening/flower\_shows/chelsea\_2007/)にはテイク・アウェー・プラン(持ち帰りプラン)なども掲載されていた(植物リストと植栽の方法も丁寧に記されている)。また同サイトでは園芸専門家による各ガーデンの音声説明やデザイナーへのインタビュー、植物の解説も掲載されている。

## <日本からの出展者の活躍>

本年はスモール・ガーデンのコートヤード・ガーデン部門(中庭)に内山緑地、シティー・ガーデン部門にスタジオLassoとAOAコーポレーションが参加し賑わいをみせた。

RHSJとかかわりの深い内山緑地は海外経験が豊富なプランツマンであり審査員経験もある二宮孝嗣氏と本誌で連載をされている鳥飼寛子女史のコラボレーションとなった(写真9)。出展した部門はちがうが日本からの3つの出展者を、日英の文化交流の観点から見くらべると非常に興味深い。

スタジオLassoはあえてデザインには伝統的な日本の要素を使わず、日本原産の植物で繊細な美意識や静けさの表現に努めた(写真10)。内山緑地は、日本庭園という土台を使いながら英国で入手できる日本の植物と英国の園芸種を丁寧に植栽に生かし日英の融合を提案。一方、AOAコーポレーションは、内山緑地の反対の手法で、西洋的な構造物に日本らしさを想起する苔を壁面に張りつめ、日本の季節感を表現する植物を多用した(写真11)。文化交流にはひとつの正解などない。そんな意味で三者がそれぞれの考えを庭という形に表現し切尔西で発表し観覧者に見くらべてもらえたことはとても有意義だ。

この他前述の「英国ガン研究所」のガーデンのあずま屋のデザインは、日本の現代建築の影響を受けてデザインされ、また壁に掛けられた彫刻も日本人作家による。設営期間にはあちこちで設営を手伝う日本人の姿もみうけられ園芸を通じての日本と英国の相思相愛は健在のようだ。

## <美術としての庭>

今年の特徴のもうひとつに美術とのさまざまなかわりを持つ庭がみうけられたことだ。今までのように彫刻作品を単に庭の一部に飾るだけでなく庭を美術表現の一環ととらえた思考ともつながる。美術教育を受けた後に園芸を学んだブライス女史の「宝石で飾られた」ガーデン(シティー・ガーデン部門)は宝石をイメージさせる植物を配置し他のガーデンにない感覚的な雰囲気を出す事に成功していた(写真12)。

また、ファルマス大学の「緑の港」ガーデンは(シック・ガーデン部門)は美術学部生が制作したオブジェやベンチなどを、園芸デザイン科の学生がギャラリー



要素を持つ庭としてまとめていた(写真13)。

ガーデン・デザインと美術とのかかわりに関しては、「The Garden」本年5月号の記事("In the name of art?" pp336)やRHSの有志が中心になって結成された「ガーデンを考えよう」グループ(ThinkinGardens)のサイトでもディスカッションがおこなわれているので参考にして頂きたい。(http://www.thinkinggardens.co.uk)

### <原点に立ち返って>

現代の庭の多くはみるだけの庭から機能と社会的責任を求められるようになってきている。環境思考は見せかけのアピールに留めず、継続可能で現実的な提案を必要としている。また、一般の人々に手の届かない高価な植物や商品をこれ見よがしに展示するのではなく、限られた素材を効果的かつ経済的に使う「工夫」がこれからの園芸により求められていくことと思う。世界屈指の園芸の祭典であるチェルシーという場を生かし、RHS本部が掲げる「園芸をより多くの人々に広め、園芸を楽しむ人々を助ける」という理念をこれからも人々に向けて発信して行ってほしいと願う。

<執筆者プロフィール>

**青山知花**(あおやま・ともか)

写真家、デザイナー。青山学院大学文学部卒。英国ファルマス美術大学修士(1999)。

英国園芸著作家協会(GWG)、英国写真家協会(ARPS)、(財)国際文化会館会員。

### 7. Fetzter Sustainable Winery Garden by Kate Frey

(Gold賞) Fetzter Vineyardsはここ数年、環境に配慮しつつ持続可能で、野生生物と共存することのできる庭のデザインを企業理念と平行して指向している。

### 8. The Fortnum & Mason Garden by Robert Myers

(Gold賞) フォートナム・アンド・メイソンの企業カラーであるペパーミント色の「ミツバチ箱」とここ数年流行している紫色を中心とした植栽のカラーコーディネーション。

### 9. East Wind by Uchiyama Landscape Construction Co & Koji Ninomiya

(Silver-Flora賞)

### 10. Studio Lasso: Garden of Transience by Haruko Seki

(Silver-Flora賞)

### 11. AOA Corporation: UN TEI - Garden of Clouds by AOA Corporation Co, Ishihara Kazuyuki Design Laboratory

(Gold賞)

### 12. The QVC Bejewelled Garden by Sarah Price

(Silver-Flora賞)

### 13. Porthgwyr (Green Harbour), University College Falmouth Students

(Bronze-Flora賞)

©Tomoca Aoyama 2007

